

2013年11月25日

日本台湾学会会員各位  
台湾史研究会各位

日本台湾学会関西部会係  
台湾史研究会事務局

## 日本台湾学会第11回関西部会研究大会

師走の候、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

本年度も下記の要領で第11回日本台湾学会関西部会研究大会を開催いたします。皆様にはふるってご出席くださいますようお願い申し上げます。

本年度も日本台湾学会と台湾史研究会との共催で行います。

### 記

日時：12月22日（日） 午前10時（受付開始）～

場所：神戸学院大学（有瀬キャンパス） 6号館2階621室

各報告 報告25分 コメントと質疑応答15分

### <プログラム>

午前の部 10:30～11:50

#### ① 翁闢「港のある街」における神戸について

黄毓婷（中央研究院台湾史研究所ポストドクター）

評論：澤井律之（京都光華女子大学）

翁闢は「新たな領域を開いた作家」と呼ばれ、「台湾早期現代派小説の代表作家」と認められていた、台湾文学史上異数な作家である。本稿では、近年発見された連載小説「港のある街」を取り上げて、その中に織り交ぜていた神戸の歴史と虚構を検証する。「港のある街」は、翁闢自身が「作者の言葉」で提示したように、「力に及ぶ限りの資料蒐集にかゝった」、ある「開港場」をモデルにした小説である。本稿では、翁闢が原型にしていた神戸の地理的、歴史的事実に即しながら、小説で造形した人物と事柄の意味を解き明かしたい。「港のある街」は社会問題の指弾を目指しているわけではないが、主要人物の出身地から事件の経緯などが神戸の地理と歴史に沿いつつ設定されていることは、ただの茫漠とした偶然ではなく、その場所の帯びた歴史的・記号的な意味合いにおいて、最初から意図されていたことを確認しておく必要がある。そして、戦争期に発表されたこの作品の存在が翁闢研究にいかなる光を与えてくれるのかを、同テキストを援用して論じる。

#### ② 蒋介石『中国の中のソ連』（1957）の歴史観

——台湾から米華相互防衛条約を基礎づける

若松大祐（日本学術振興会特別研究員 PD）

評論：吉田豊子（京都産業大学）

蒋介石はなぜ『中国の中のソ連』（蘇俄在中國、1957）において、歴史を書いたのか。本報告は、『中国の中のソ連』で展開された歴史叙述が持つ意図を、現代台湾史における国民党政府のイデオロギーの側面から位置づける試みである。同書は、民主主義と全体主義という枠組みでの台

湾海峡兩岸の位置づけや、自国（台湾）と米国との盟邦関係などという、現代台湾史を一貫する発想を説いており、私たちは同書の存在を見過ごせない。にもかかわらず管見の限り、『中国の中のソ連』については、同書を絶賛する出版当時の文章や、同書の成立過程をまことしやかに伝える後世の裏話はあるものの、同書の内容を総体として理解し、現代台湾史の中で位置づけようとした研究は今のところない。

そこで、本報告では何よりもまず『中国の中のソ連』のテキストを精読する。（従って、内部資料や近年流行の蒋介石日記を使用しない。）その際、同書の主題でもあり、現代台湾史のキーワードでもある民主という概念について、その意味を明らかにする。とりわけ、民主の由来すなわち民主の歴史がいかんにか説明されているのかに注目して、考察を進める。

こうした考察を踏まえ、蒋介石が米華相互防衛条約（中美共同防禦條約、Sino-American Mutual Defense Treaty、1954年）を基礎づけるために、『中国の中のソ連』で歴史を説いていたことを明示したい。

午後の部 12:50～14:50

### ③ 植民地期台湾における国語保育園——その具体的諸相

宮崎聖子（福岡女子大学）  
評論：山本和行（天理大学）

本報告では1930年代後半から台湾において漢族系住民(以下、台湾人と表記する)を対象に、全島的に急速に普及した「国語(日本語)保育園」を取り上げ、その具体的状況について検討する。この保育園は、公学校(1941年以降、国民学校に再編)にあがる前の幼児を対象としたもので、内地の農繁(期)託児所をモデルに創設された。社会教育事業に分類される。台湾においては、3歳から6歳くらいまでの子どもを預かり、遊びや日常生活を通して日本文化を注入し、日本語を教えることが主たる目的であった。日本人は、台湾人母親を「無教養」で「近代化」から遠い存在とみなし、それに代わって子どもを教化する必要に迫られていた。その背景として、満州事変に始まり、日中戦争、太平洋戦争を経験するなかで、日本が戦争遂行に必要な人的資源を被植民者に頼らざるを得ない状況が出現したことが挙げられる。

このような教化システムは、これまであまり注目されてこなかった。それはもともと各州ごとに運営を開始し、その呼び名も地域によりまちまちで、資料も分散して存在していたためであろう。国語保育園は、筆者による暫定的な名称である。しかし「部落」ごとに設置された保育園は、1943年の時点で7万人の幼児を収容していた。また早期に日本語教育を受けた人は、戦後70年近くたった現在でも日本語の運用能力が高い。よってその影響力は小さくなかったと考えられる。

ここでは資料の得られた台北、台中、台南州を中心に述べる。国語保育園の保育時間や子どもの年齢は、地域により異なる。これら保育園は地域の名望家の資力や公学校女性教員や女子青年団員の労働力を提供させる形で定着していった。保育場所には公学校の片隅や部落集会所などが使われた。保育の内容は幼稚園に準拠しており、戦局が悪化するにつれ、天皇中心主義的、軍国主義的な色彩を強めていった。

### ④ 京城・台北両帝国大学の教員構造からみた帝国日本の学知の形成

井上弘樹（青山学院大学 DC）  
評論：交渉中

本研究では、京城帝国大学と台北帝国大学における教員構造の比較を通じて、帝国日本の学知の形成空間の特徴を論じる。

両植民地帝大に関する歴史研究は、制度史や個々の教員、及びその研究実績に焦点を当てた研究を中心に、近年増加している。ただし、以下の疑問については、未だ十分に明らかではない。すなわち、なぜ台北帝大には台湾人教授（杜聰明）がおり、京城帝大には朝鮮人教授がいなかったのか、そして、どのような仕組みや論理の下で、日本人が研究職を独占したのか、という疑問

である。さらに、両帝大の比較研究も、単に両帝大の特徴を併記したにとどまるものが多く、帝国日本の植民地における学知の形成空間に関する歴史像が描けているとはいえない。

これを踏まえ、本研究では、具体的に以下の点に着目する。すなわち、①両帝大の教員構造の比較分析、②杜聡明の教授就任の要因、③両植民地帝大の政治・社会・制度的背景とその異同、④当事者の認識、である。そして、両帝大の共通性と差異に留意しつつ、帝国日本を支えた学知が、誰によって、どのような論理の下に形成されたのか、という学知の形成空間の特徴を明らかにする。

資料は、両帝大の教員名簿に加え、杜聡明をはじめとする関係者の回想録が重要となる。なぜならば、教員間の民族構成に関する明文化された規定はなく、当事者が語るエピソードの中からこうした教員構造の背景を探らなければならないからである。

## ⑤ 植民地台湾における地方官僚の役割

### —1897から1898年にかけての「街庄社長協議費」の改正をめぐって

黄美恵(文藻外語学院)

評論:やまだあつし(名古屋市立大学)

第三次伊藤博文内閣(1898年1月12日～6月21日)首相は、「台政刷新」の急務を第四任総督児玉源太郎と民政局長後藤新平に託し、1898年3月からこの第三次伊藤内閣の台湾統治体制が起動した。児玉総督と後藤民政局長の最初の課題は、台湾総督府の再建と台湾統治政策の再構築であった。1898年5月台湾総督府官制と台湾総督府地方官官制の改正案が纏まり、これにより台政改革の第一歩が始まる。翌月より民政局・財務局を廃止して民政部を置いて事務の統括を行うとともに、三県を廃止し同時に撫慰署を廃してその事務を辨務署中の一課に置いた。

一方、台湾島内における総督府及び地方行政機関は地方制度の改正をいかに進めていたか。この部分は研究史にあまり見られない。そこで、筆者は1897から1898年にかけての「街庄社長協議費」の地方制度の改正に焦点をあて、街庄社長事務費の国費支給から住民負担に変わった経緯を明らかにする。それから各県庁地方長官の意見書を通して、台湾地方官僚の関与の実態を考察し、さらに「台政刷新」に結びつきその意義を考えたい。

## シンポジウム「セデック・バレ」をどうみるか 15:00～17:00

パネリスト: 中村平(神戸女子大学: 原住民研究の立場から)

パネリスト: 松田京子(南山大学: 歴史学研究の立場から)

パネリスト: 赤松美和子(大妻女子大学: 文学研究の立場から)

パネリスト: 影山理(シネ・ヌーヴォ代表: 映画興行者の立場から)

司会: 五十嵐真子(神戸学院大学)

懇親会 17:30～ (会費 3000～5000円)

<アクセス>

JR 明石駅からバス 20 分： 神姫バスの北 1 番乗り場から「神戸学院大学行」で終点下車

## Arise Campus

海と山にはさまれた自然環境に恵まれたロケーション。

機能的かつ遊び心のあるキャンパスは、

いつも活気でいっぱいです。

※マップ内の青色の番号をクリックすると詳細をご覧になれます



<日本台湾学会関西支部会係>

京都光華女子大学キャリア形成学部 澤井律之

〒615-0882 京都市右京区葛野 38 番

tel 075(325)5343

mail rb062@mail.koka.ac.jp